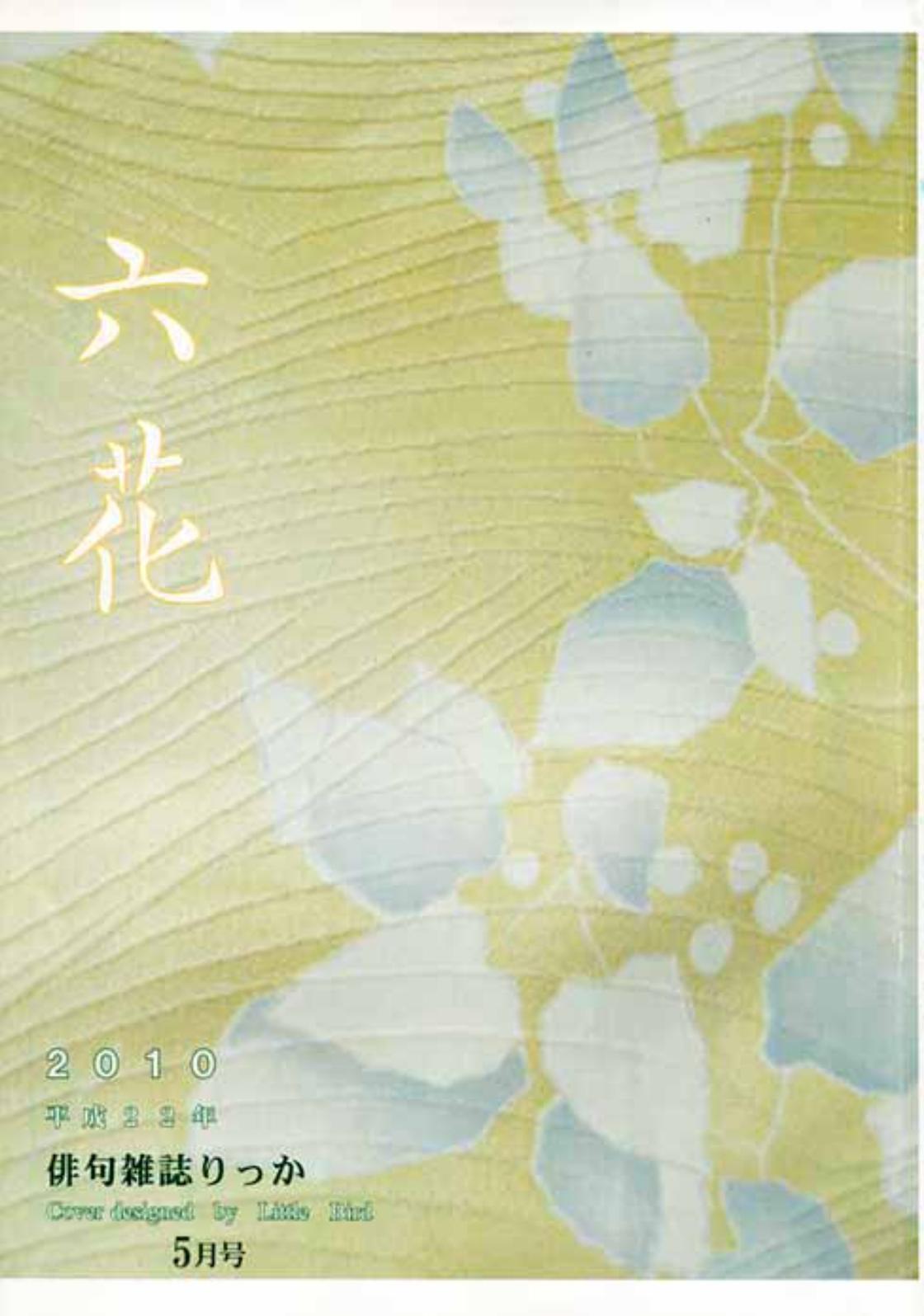


# 六花



2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Little Bird

5月号

い 石段を下りて野蒜を洗ひをり  
ま 真直ぐなるやだけ箭一本 武具飾  
は 葉に透けて尻とんがれる雨蛙  
む 武者人形畳踏むたび揺れにけり  
か 風音をとらへし耳に花の冷  
し 白鷺の脚に濡れたる磧石  
た 田返しの後の雨見てをりにけり  
け 警戒を強めて鼻の猛りをり  
と 戸締りを忘れて花の下にをり

り 料<sup>りょう</sup>られて青き星飛ぶ桜鯛  
の 野焼きの火池の葦へと伸びゆける  
お 遅桜<sup>みづ</sup>水分<sup>わ</sup>かれをけふ越えにけり  
き 疵付きし枝の振れる大桜  
な 何人へ枝を伸ばせる桜かな  
と 年頃の足ふらつかす花吹雪  
い 犬が嗅ぐ鳥の落とせし花の房  
ふ 封印のある井戸蓋に桜薬  
も 毛氈に幔幕さくら野点なる

いとけたとしかむはまい  
尖りたる花びら重ね薔薇ふむ  
献上の帯にちらつく新樹光  
たちまちに鯉に吸はるる落花かな  
尻揚げて緋鯉の姿探りをり  
鉄かね臭き水に金魚を放ちけり  
剥き終へし筍の浮く盥かな  
はだけるをかまはずにをり籐寝椅子  
巻き上ぐる水飴に透く夜店の灯  
色鯉の肉づきのよくうねりけり

り立夏かな膝を崩して針運ぶ  
の乗込や鱗と飛沫しぶき飛び散らせ  
お折詰に残す羊羹古茶やさし  
き切り分けて子等にあたへる水羊羹  
な菜の花も終ひの頃と胡麻振れる  
ととーとーと父を呼ぶ児よ鯉幟  
い一夜にて勇ましくなり鯉幟  
ふふつくらと母に抱かれ菖蒲風呂  
もちちてみて重きを選びぬ柏餅

# 寒鯉の鰭を広げて動かさる

永田 勇

平らかな水の底なる寒の鯉

鴨の脚水面切り裂き着水す

百合鷗嘴ぶつけ餌を奪ふ

裸木の枝先空を掴みけり

かんごいのひれをひろげてうごかざる ながたいさむ

鰭を広げて動かないのも寒鯉の特徴だと発見した。確かに泳ぐとき鯉の鰭は前後左右に動かせ、じっとしていない。だが寒中には泳ぎ回らないから、あまり鰭を使わないが、底近くの水中に浮いている場合は、少しでも体のバランスを取るために少しでも鰭は使う。しかしこの場合は寒の極みであるから、鯉の腹が底に着いているとも考えられる。したがって、鰭は広げたままになっている。そこを捉えて詠んだ。俳句には発見も大切なことである。そのためには物をじっと見つめる根気が必要。Rこう会参加で地道に写生をして鍛えた実力を発揮。

雪 卿 集

ささめ雪

梶浦玲良子

年の豆とんで南京玉すだれ  
煮凝のかなたに山脈つづきげり  
寒菅の風のゆききやにはたづみ  
石庭は暮れをいそがず細雪  
七種の雨の匂ひが二の鳥居

寒 鯉

笹村 政子

寒鯉のまつすぐなるは美しき  
身の丈の影を脱ぎたる寒の鯉  
木洩れ日に惨む大鯉寒ゆるむ  
ゆるぎなき巫女の禳や午祭  
風に鳴る幟のほつれ午祭

せつじゆしゆう  
雪樹集

雪山

筒井八重子

鴻の鳥小春日の空おほひけり  
雪山を遙に進みぬたりけり  
冬の波しづかに立つる日なりけり  
皿そぼの皿つみ上げて小春なる  
雪山を眺め道行く分水嶺

寒入日

志方 章子

枯蓮のつぎなる荅つけてをり  
元日の嫁を泣かせてしまひけり  
肩車してより進み初詣  
寒入日彼岸此岸の間あわいかな  
池涸れて小さき反橋あらはるる

# 蛍雪譚 六甲

北国のストーブ短気はや真つ赤

貝森 光洋

短気な人をたとえて、よく、「瞬間湯沸かし器」などとも言ふ。北国では点火すればいち早くストーブが効くように冷えが強い地方ならではの設計がしてあるのだらう。そこを擬人化して「短気はや真つ赤」と言った。特に達磨ストーブなどは、形からして人間に見えないこともない。真つ赤に焼けたロボットのようなストーブが連想される。

石庭は暮れをいそがず細雪

梶浦玲良子

石庭の多くは枯山水で、敷き詰めた砂は水を表す。その庭に降る細雪を眺めていると、冬であるのに夕暮れがゆつくりと帳をおろしてくるようだというのである。もつとも雪によつてでなくても白砂であるからほの明るさはのこるのであるが、雪だからことさら明るさが残っているのである。しかし、その物理的な現象よりも心理的にゆつたりとした心持ちが暮れを急がせないのである。静謐のよろしさが伝わってくる。

# 六花集 会員作品

雲かかる山へ伸びたる冬田徑  
風花やうなじに息のかかるごと  
冬波を遠ざかるほど轟けり  
病むことを怖れる暮し虎落笛  
だんだんに声をひそめる鬼やらひ

平居 滯子

しぐるるや眉山びざんにかかる吉野川  
煙えん燄えんと四国三郎冬の空  
しぐれ来て津田の松原瀬戸曇り  
白鳥の杜しぐれてや播磨灘  
一月や峯に雲おく紫雲山

五ヶ瀬川流一

煙えん燄えん|| 煙と炎